

バーナード・レフキ、小林恵智共著「将軍の戦訓 99 —リーダーシップの教訓と心得—」

光人社 2001年12月21日刊を読む

リーダーは良き生徒だ

1. (1) 「戦場においては体系的な勉強をする時間などない。そこでは過去に学んだことを実行し、結果を通して経験的な勉強をするだけだ」
  - (2) 言い換えれば、職場で勉強する時間はない。そこでは過去に学んだことを実行するだけだ。これは、軍隊でも会社でも同じことだろう。
  - (3) 「備えよ常に。平時には取るに足りないと思うことでもしっかりと学べ。有事になればそれが命を守ることを覚えておけ」とフランス陸軍のフォッシュ元帥は語った。
2. (1) 職業軍人、言い換えればみずから進んで軍隊で働く者にとっては、常々が勉強なのだ。平時においては「勉強」そのものが仕事であり、手抜きをすることは犯罪になる。備えることは自分と仲間と国家の利益を確保することに通じ、準備なしで戦場に赴くというのは生命を捨てに行くことと同義なのだ。そのため、平時においては乾いたスポンジが水分を十分に吸収できるのと同じように、本からの知識や経験などあらゆるものから百パーセント吸収しなければならない。今日学んだことが明日の自分や守るべき命を救うことになるのだから。
  - (2) 私は、真のリーダーを目指し、地上でもっと良い案内人になることができるようにと飛行機の操縦を学び、戦闘での負傷者の救助と心の支えとなれるように衛生兵の勉強をして資格も取った。しかし、それ以上に重要だとわかったことは、自分自身が聡明、屈強で心優しい指導者でなければならないことである。それを知っている指揮官のみが強いストレス状態でも沈着冷静にリーダーとしての行動ができるのだ。
3. (1) 1940年に、ジョージ・マーシャル将軍は以下のように議会で証言した。

「私は戦場において29師団のうちおよそ27師団を率いた。そこにはさまざまな失敗があり、特に上級士官たちの意見の対立があったが、その対立の原因は肉体疲労から来るストレスであった。経験とともに決断力は上がるが、筋肉の回復力は失われる」そして、彼は続けた。

(2)「戦場におけるリーダーシップは、リーダーの脚、胃、神経系、困難や睡眠不足に屈しない能力なくしては発揮することはできない。そこでは精力的かつ積極的に兵士たちを指揮し、支配することができなければならないからだ。第一次世界大戦の際、多くのリーダーが精神に支障を来して交替させられた。彼らは強い肉体疲労により悲観的になってしまい、目標に対する粘り強い取り組みや、疲れた兵士を鼓舞するリーダーシップを発揮できなくなってしまったのだ。

P35 ~ 38

[コメント]

リーダーとして求められるものは何か。

(1)いざという時にすぐ役立つ体系的な勉強を平時に怠らないこと。——今日学んだことが明日の自分や自分の守るべき命を救う。

(2)困難に打ち克つ強靱な肉体。

このことを本書は示している。リーダーシップを考える上での必読書と確信する。

- 2009年3月30日林明夫記 -